

建築家・都市計画家・造園家の社会貢献

—第一次大戦後のランスにおける都市復興と田園都市の開発—

三田村 哲哉

(環境人間学部)

1. はじめに

20世紀初頭のフランスではパリ国立美術学校¹⁾で教育を受けた建築家の中から都市に関心を抱き、建築ばかりでなく都市計画に尽力する者が登場した²⁾。ミュゼ・ソシアル³⁾ (Musée Social) の都市・農村衛生部会⁴⁾ (Section d'hygiène urbaine et rurale) にこうした建築家のほか、造園家らが集まり、フランス都市計画家協会 (Société Française des Urbanistes) の創設や同国で最初の都市計画法⁵⁾、コルニユデ法 (La Loi Cornudet) の制定に尽力するとともに、植民地や保護領を中心に北アフリカや中東、東南アジア、南米などの国外のみならず、第一次大戦後、国内の地方都市で都市計画に大きな功績を残した。

そのうちのひとつが、ランスにおける都市復興と田園都市の開発である。先行研究には地元の建築史家によるアール・デコの建築とランスの都市復興に関するものがあるが、田園都市に関するものは限られている。本稿は、こうした研究状況を鑑み、都市復興と田園都市を組み合わせ、そのうち特にこうした民間の公益団体が貢献した建築家や都市計画家、造園家たちによる建設事業を明らかにするとともに、専門家による社会貢献を捉え直すことを試みたものである。

2. 都市復興

フランスにはパリやダンケルクなどのように、セーヌ県知事ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン (Georges-Eugène HAUSSMANN: 1809-1891) による前世紀の都市開発とは異なる新たな都市計画が、その法律の制定以前から、すでに検討されていた都市がある。そのうちのひとつランス (以後、直後に“Lens”の記載がない「ランス」はすべて都市 Reims を指す) は、第一次大戦開戦の前後からさまざまな形で都市計画が繰り返し検討されてきた。その主な内容は、同市の土木技師マルセル・フォレストイエ (Marcel FORESTIER: 生没年不詳) が復興の絶頂期にあたる1927年6月から半年をかけて回顧し、雑誌「近代建築⁶⁾」に11回に渡って掲載した連載記事から明らかである。この復興計画は、ランス市の意向も働き、地元でなく、当時パリから派遣された建築家らによってはじまった。同市長補佐が1916年から翌年まで土地収用

に関する法案のために、パリのミュゼ・ソシアル⁷⁾を訪れた後から、フランス都市計画家協会の設立者9名のうちの5名までもがさまざまな形でランスの都市計画と復興計画の検討に参画した。そのなかにはルーマニア、アルジェリア、トルコを含む国内外で公有および私有の公園や庭園を手がけて、地元ランスにオリンピック (1924) のためのスポーツ施設、ポムリー公園 (1911、現・シャンパーニュ公園) を残した造園家エドゥアール・ルドン (Édouard REDONT: 1862-1942) もいた。また後述の通り、9名の設立者以外にもミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会で尽力した者もあり、ランスの事業に参画した建築家や都市計画家の数はさらに増える。

都市計画そのものは、地元のアンリ・ピキヤール (Henri PIQUART: 1860-1946) による中心市街地の検討 (1915)、エルネスト・カラス (Ernest KALAS: 1861-1928) やルドンによる計画案 (1916)、レオン・ジョスリー (Léon JAUSSELY: 1875-1932) による新たな道路規格の検討 (1917-18)、さらにジャン＝マルセル・オビュルタン⁸⁾ (Jean-Marcel AUBURTIN: 1872-1926) とジョージ・バーデット・フォード⁹⁾ (Georges Burdett FORD: 1879-1930) による都市復興に関する検討 (1917) のように、第一次大戦中から毎年提案が相次いだ。ミュゼ・ソシアルはこのフォードの検討の後に、再来仏直後の1918年5月2日にパリの本部にフォードを呼んで集会を開き、アメリカにおけるタウン・プランニングに関する議論を展開した¹⁰⁾。

一方、終戦後の被災した街の状況は想像を絶するものであった。14,150棟以上の既存の住宅のうち、全焼が7,903棟、被災が6,247棟、被災しなかったものは60棟ほどに過ぎなかった。さらに公共施設に目を向けると、大聖堂や市庁舎、劇場といった主な公共施設を含む118棟が全壊、35棟が被災しており、ランスの街のうち9割が被害を受けるという状況に陥った¹¹⁾。そのためランス市は1919年1月15日に、ヴィクトール・ラルー (Victor LALOUX: 1850-1937)、アンリ・ドグラヌ (Henri DEGLANE: 1855-1931)、ルイ＝マリ・コルドニエ (Louis-Marie CORDONNIER: 1854-1940)、ジャック・エルマン (Jacques HERMANT: 1855-1930)、ルイ・ボニエ (Louis BONNIER: 1856-1946) ら、ミュゼ・

ソシアルに貢献する者を含む建築家や都市計画家を審査員に迎えて都市計画に関する設計競技を開催した。参加者は建築家や技師ら22名に上ったが、いずれの提案も実現不可能な理想郷を追い求めたものに終始し、すべての案が実現することなく終わった。

そこで市長のシャルル・ロッシュ (Charles ROCHE: 1880-1953) は、1916年8月に戦災都市の再建までの道筋とその方法を開拓するために、当時創設されたばかりの民間の相互慈善団体「ルネサンス・デ・シテ Renaissance des cités」に対して都市計画の検討を依頼したのである¹²⁾。この団体は社会、芸術、技術、行政、産業の集約や、社会・経済・財政問題を睨んだ政策と立法、都市の「再建・拡張・美化」の検討、地域主義と社会芸術の尊重を目的として創設され、ミュゼ・ソシアルを中心に検討されていたユルバニズムを牽引する地方都市の団体のひとつであった¹³⁾。その活動の範囲は拡大し、このほかの地方都市でも同様に組織の創設が検討されたほどであった¹⁴⁾。当時、都市計画の実績の一例には、コルニュデ法制定の直前で、ランスの設計競技の直後にあたる1919年2月に、1914年当時の人口10,399人がおよそ20,000人に急増する都市を想定して開催されたショニーの都市復興に関する設計競技の指導が挙げられる¹⁵⁾。またこうした都市計画の基本方針が上記の通り、「再建・拡張・美化」で、コルニュデ法の「開発・拡張・美化」に基づき都市の復興に合わせて検討されたものであることは想像に難くない。

1920年2月5日にランス市議会で採択された都市計画案は、アメリカ赤十字フランス再建局長として来仏し、同時期に著作『実践都市計画¹⁶⁾』を残したフォードが、ルネサンス・デ・シテの依頼を受けて描いたものであった(図1)¹⁷⁾。この「開発 aménagement」と「拡張 extension」を目指したフォードによる構想はボニエ、アドルフ・デルヴォー (Adolphe DERVAUX: 1871-1945)、造園家ジャン＝クロード＝ニコラ・フォレストイエ (Jean-Claude-Nicolas FORESTIER: 1861-1930)、ジョスリーという4名全員がミュゼ・ソシアルの建築家および造園家と、保健衛生の専門家からなるルネサンス・デ・シテの技術諮問委員会でさらに検討が進められるとともに¹⁸⁾、ルイ・スー (Louis SÛE: 1875-1968)、シャルル・アベラ¹⁹⁾ (Charles ABELLA: 1879-1961)、ルドン、地元の建築家によるランス市諮問委員会で検討された後²⁰⁾、エヌ県主任建築家のアベラによって実現した²¹⁾。

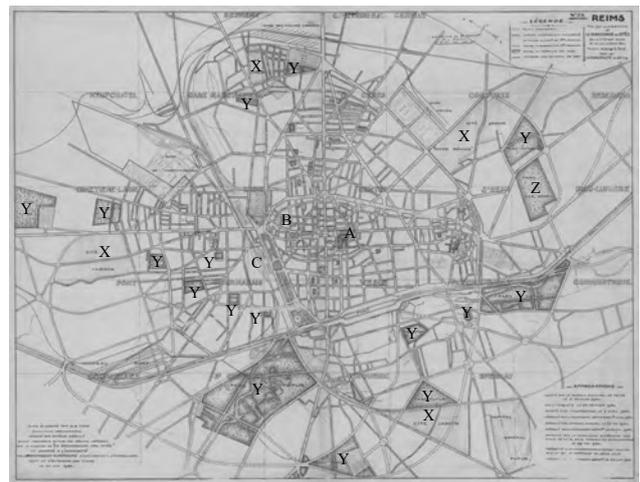


図1 ランス基本計画 フォード 1920年
(出典) FORD (George Burdett), *Reims plan fait sous la direction de la Renaissance des cités mission de G. B. Ford établi par la Municipalité de Reims*, Reims: Direction de la Renaissance des cités mission de G. B. Ford, 1920. 筆者加筆。A: 大聖堂、B: 市庁舎、C: 中央駅、X: 田園都市予定地、Y: 公園予定地、Z: ボムリー公園予定地。

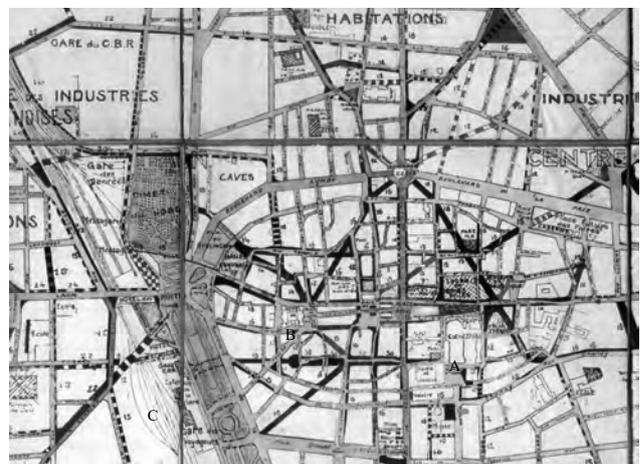


図2 ランス基本計画 フォード 1920年 中心部の拡大図
(出典) RIGAUD (Olivier), *Reims à l'époque de l'art déco, une ville reconstruite après la première guerre mondiale*, Reims: Scérén-Crdp, 2006, p.28. 筆者加筆。A: 大聖堂、B: 市庁舎、C: 中央駅

この都市計画案は1923年3月23日のミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会の会議で報告された通り、コルニュデ法に基づく都市計画に関する検討がカンブレ、サン＝カンタン、アルマンティエール、アヴィオン、ヴェルダンほか、15都市で進められる中で最初の実例になった²²⁾。

フォードの案は115,000人の人口が倍増し、さらに300,000人に達することを想定して描かれたもので、この提案の中でもっとも重視されたのが道路であった²³⁾。その主旨は、市内中心部では前世紀のオスマンが道路を開発したように、被災した街区で格子状の既存道路網に対して対角線上に道路を新設することと、それに合わせて新たに街路を形成すること、さらにガンベッタ通りやシャンシー通りのように、旧来の道路の片側を拡張することという、これら3つの道路計画にまとめられた。それぞれの道路に着目すると、それは

まるで前世紀の破壊を伴う暴力的な都市計画のように見えるが、この力強い都市計画が逆に新たな建築需要を生み出し、全土から建築家、画家、彫刻家らが集まる契機になった。

この都市復興に参画した建築家は、地元のマックス・サンソリュ²⁴⁾ (Max SAINSAULIEU: 1870-1953) らを含めて総勢 60 名に及び、アンドレ・グラネ (André GRANET: 1881-1974) による百貨店「ファブリック・フランセーズ」(1926) やフランソワ・ル・クー (François LE CŒUR: 1872-1934) のセレ郵便局 (1930)、シャルル・ルトロヌ (Charles LETROSNE: 1868-1939) によるプロテスタント寺院 (1928)、ジャック・ドバ=ポンサン²⁵⁾ (Jacques DEBAT-PONSAN: 1882-1942) と地元のポ・ゴッセ (Pol GOSSET: 1881-1953) のドゥース邸 (1934) ばかりでなく、地元の建築家による共済組合会館 (1926)、カピュサン通りの集合住宅 (1927)、ヴェール通りの集合住宅 (1930)、印刷所「レクレール・ド・レスト」(1928、破壊)、百貨店「ギャラリー・レモワズ」(竣工年不詳) など、これら新たに建設されたほぼすべての建築が、フォードの提案した 3 種の新たな道路に沿って建設されたのである (図 2)。つまりランスを代表するこうした新たな建築は第一次大戦中から長期に渡り検討された都市計画に基づき建設されたものであった。

3. 田園都市

1908 年、ミュゼ・ソシアルに都市・農村衛生部会が設置され、低廉住宅と都市計画に関する議論がはじまった²⁶⁾。一方、第一次大戦以前の労働者住宅に視点を当てると、たとえばフランス北部の低廉住宅には、フランス北部鉄道のラウル・ドトリ²⁷⁾ (Raoul DAUTRY: 1880-1951) の尽力によるものがある。これは 500 戸の木造住宅や硬材で建設された 600 戸の戸建住宅による住宅地で、リールやランス (Lens) のほかにも、工期が 6 ヶ月で整備されたセポワの低廉住宅地もあった²⁸⁾。当時こうした住宅地という面では、コルニユデ法に基づく基本計画が進む都市を中心に整備が進み、たとえばダンケルクでは「ホワイエ・フラマン」、アルマンティエールでは「ホワイエ・アルマンティエロワ」、ランでは「ホワイエ・ラノワ」という低廉住宅会社が国の財政支援を受けて創設され、こうした事業を担うことで都市復興の一役を担っていた²⁹⁾。戦災の被害が大きかったランスでもこうした株式会社が設立され、同様の役割を担う者が登場するが、これらの都市とは大きな

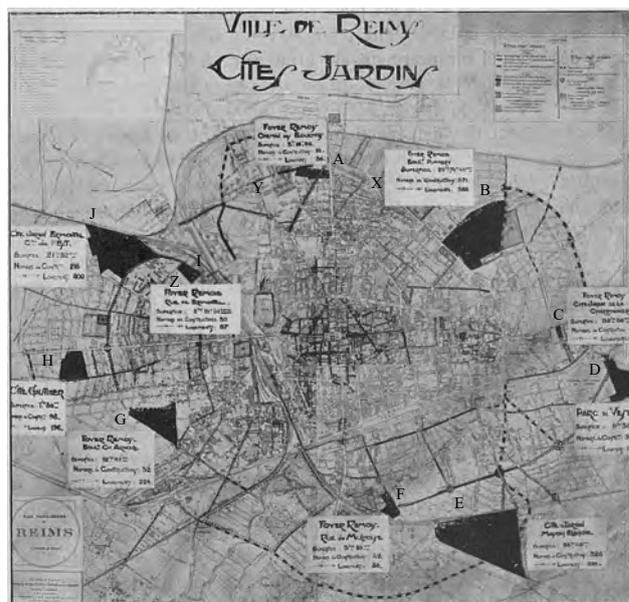


図3 ランスの田園都市 計画案 配置図

(出典) *La Construction moderne*, Paris, 13 novembre 1927, p.81. 筆者加筆。A: 「セレス」、B: 「シュマン・ヴェール」、C: 「サン=レオナル」、D: 実現せず、E: 「メゾン・ブランシュ」、F: 「ミュルーズ」、G: 「トワ・フォンテーヌ」、H: 「ゴティエ」、I: 「プリモンテル」、J: 実現せず。図3に記載されていないが、実現した田園都市 X: 「ヴァルニエ=ダヴィド」、Y: 「シャレ」、Z: 「アルティルリー公園」。このうちホワイエ・レモワによる田園都市は A、B、C、F、G、I、Y、Z。

相違点がひとつあった。それが都市復興でも貢献した都市・農村衛生部会で尽力した建築家や都市計画家が貢献したという点である。

ランスではジョルジュ・シャルボンノー³⁰⁾ が銀行「ケス・デパルニユ」の主導の下で、1912年に同市の商工業者らが出資した 1,250,000 フランを元手に、その郊外におよそ 5 年から 10 年で 1,025 家族向けの健全堅牢で衛生環境の良い、約 1,100 棟の住宅からなる住宅地を整備するために株式会社ホワイエ・レモワを創業した。そして 1914 年には 36 戸棟が竣工、80 棟が工事中という、第一次大戦中から早速事業が展開された。

戦後の 1919 年にはランス郊外に戸建ての 2 階建て住宅、およそ 600 戸が建設された。いずれも独立住宅でありながら、これらの小さな住宅をまとめてひとつの住宅街区「ブロック」を形作り³¹⁾、タイプにして 15 種類の住戸からなる田園住宅を建設したのである。ミュゼ・ソシアル総裁のジョルジュ・リスラー (Georges RISLER: 1853-1941) は当時、こうしたホワイエ・レモワの実績を踏まえて、フランスで最も美しい田園都市のひとつを作ったのはシャルボンノーであると讃えた (図 3)³²⁾。

フォードが 1920 年に描いた基本計画と、その後実現した田園都市を比較すると、郊外地にフォードが想定した以上に数多くの田園都市が建設されたことがわかる。基本計画によると、オビュ

ルタンが手掛けたもののうち、「緑の道」を意味する田園住宅「シュマン・ヴェール Chemin Vert」のほか、当初は4ヶ所に用地が確保されたにすぎなかったが、それ以外の6ヶ所の田園都市はその後いずれもが、ほぼフォードが公園整備のために用意していた用地に建設されたのである。

このうち「シュマン・ヴェール」の開発の要点は次の2つであった。ひとつはこの大きな田園都市の中心部に位置する中核施設と、それぞれ庭付きの住戸の組み合わせによって構成された点で、そのどれもがいずれかの構内道路に面するように配置された(図4)。こうした田園都市内の道路は、構内に円環を成すように計画され、さらにほぼすべて戦間期に普及した自家用車を念頭に、車道と歩道が、主要道路の両側には街路樹がそれぞれ組み合わせられたものであった。また竣工当時の敷地面積は30haであったが、フォードの基本計画にはない約20haの拡張地が準備された点に期待と成功が垣間見られる。

もうひとつは、オビュルタンの提案した全体計画が忠実に実現されたという点である。それらは、中核施設および住戸それぞれに至るまでの案そのものが綿密に反映されたからである(図5)。市庁舎などの中核施設が整備されたが、その一方で低層の新たな住宅が建ち並ぶ。こうした構内でランス大聖堂に向けて突出したサン=ニケーズ教会堂³³⁾(1923)が「シュマン・ヴェール」の中心に位置することは明らかである(図6)。

中核施設のひとつ市庁舎(現・集会施設)³⁴⁾は、おそらく「社会センター」という提案に基づいたものようである(図7)。地方自治体の行政庁舎ではなく、商店建築、図書館とサークル、3つの会議場、550席の映画室兼祝宴場(図8)、青少年クラブ、体育室、シャワー室を含む文化の家の役割を果たすものであった(図9)。そしてサン=ニケーズ教会堂と市庁舎、医療施設や社会教育、軽労働施設を伴った子供の家(現・学校施設)が中心部の運動場の3辺を取り囲み、その周辺部に木造やレンガ造による住宅がそれぞれ建設された(図10)。

住宅は先述の通りさまざまなタイプが検討されたが、中心となるものは屋根裏階付きの平屋建ての棟が軸線対称となるような形に2住戸で形作られ、1階に食堂と寝室、屋根裏階に2つの寝室が用意されたものであった(図11)。通常は、1室がおよそ3.5m×4.0mの矩形の部屋で、そのほかに洗濯室、便所、倉庫、およそ300㎡の庭に物置、鳥小屋やウサギ小屋が付き、さらにおよそ50住



図4 田園都市「シュマン・ヴェール」配置図 オビュルタン(出典) *L'Architecte*, Paris, juillet 1926, p52. 筆者加筆。A: サン=ニケーズ教会堂、B: 市庁舎、C: 子供の家、D: 商業施設、E: 運動場



図5 同 航空写真(出典) GOULDEN (A.), LOTH (L.), *Le Foyer rémois*, Reims: Debar & C^o, 1933, p.5. 筆者加筆。A: サン=ニケーズ教会堂、B: 市庁舎、C: 子供の家、D: 商業施設、E: 運動場

戸に対して店舗や工房が検討された(図12)³⁵⁾。こうした要素の組み合わせがこの田園都市の住宅のひとつの基準であった。

「シュマン・ヴェール」では、このような一連の計画案に基づき、1922年4月には602戸の住戸が整備されるとともに、全体で食料品店を中心に12軒を大型店舗が用意された。また、住宅地の整備には敷地内の土木事業が必要になり、構内道路と水道設備はそれぞれおよそ7kmに、排水渠は14kmに及び、さらに電気設備や街灯が整備され、当時フランス都市計画家協会会長のオビュルタンがこうしておよそ2,200人の子供を含む3,600人が暮らす田園都市を完成させたのである³⁶⁾。

ランスの郊外地には「シュマン・ヴェール」と同様に数多くの田園都市が整備された。そのうち北西に位置する「トワ・フォンテーヌ Trois Fontaine」は、1920年代に数多くの集合住宅を残した地元のジャン・ド＝ラ＝モリスリ(Jean de la Morinerie: 1874-1954)がシャルル・アルヌル大通りに面した12haの敷地に、「子供の家」の役割を果たす「社会センター」を中心として合計324戸の住戸を用意した2番目の田園都市である³⁷⁾。その主な中核施設は食料品店と託児所、さらに駐車場で、3戸から7戸を1棟に収めた棟など、住戸は「シュマン・ヴェール」のものともそれぞれ異なる9種類が準備され、およそ1,000人の暮らす住宅地が形成された。

ホワイエ・レモワはこのほかにも数々の田園都市を残した。地元のエドモン・エルベ(Edmond HERBÉ: 1864-1960)とモーリス・デフォ(Maurice DEFFAUX: 1884-1926)がランスの南西3.1haの敷地に運動場や食堂とともに全42棟、住戸数78戸の住宅を整備した「ミユルーズ」、ルトロウが手がけた全30棟、住戸数67戸からなる「ブリモンテル」のほか、市内に数多くの集合住宅を建設した地元のアベル・ロベール(Abel ROBERT: 1873-1963)らによる「アルティルリー公園」と「シャレ」、ロベール・ジャクタ(Robert JACTAT: 1885-1980)による住戸数44戸の「サン＝レオナル」、モーリス・ブリサル(Maurice BRISSART: 1874-没年不詳)による3.16haの敷地に14棟、住戸数38戸からなる「セレス」(1923, 1929)はすべてホワイエ・レモワによるものである³⁸⁾。

このほかにもマルセル・ウダン(Marcel OUDIN: 18??-1936)が7.8haの敷地に96棟、200戸の住宅を建設した「ゴティエ」のほか、エルベとデフォが324戸を用意した低廉住宅地「メゾン・ブランシュ」、オビュルタンが3,850㎡の敷地に4棟、



図6 同 航空写真
(出典) GOULDEN (A.), LOTH (L.), *op.cit.*, p.3.



図7 同 「社会センター」案 正面
(出典) GOULDEN (A.), LOTH (L.), *op.cit.*, p.30.



図9 同 市庁舎 正面
(出典) 筆者撮影。



図10 同 運動場 正面が市庁舎 右が子供の家 手前にサンニケーズ教会堂
(出典) 筆者撮影。



図11 同 住宅地の一街区
(出典) 筆者撮影。



図8 同 市庁舎 祝宴場
(出典) GOULDEN (A.), LOTH (L.), *op.cit.*, p.13.

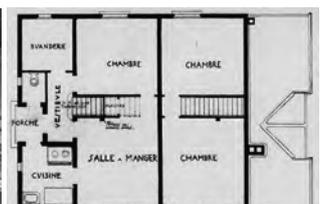


図12 同 2住戸の一例 1階・2階平面図
(出典) GOULDEN (A.), LOTH (L.), *op.cit.*, p.8.

12戸の住宅を建設した「ヴァルニエ＝ダヴィド」、280戸まで拡張可能なヴェスル公園に隣接した142戸の住宅地まで検討された³⁹⁾。

このうちおそらく当時理想とされた田園都市に関する具体的な提案が実現したのは、ミュゼ・ソシアルの主導で検討がはじまった「シュマン・ヴェール」であった⁴⁰⁾。前世紀に遡れば、パリ以外にもカブール（1855）などの地方都市で同心円状の住宅地計画のほか、新たな都市計画が19世紀にすでに検討されていた。しかし「シュマン・ヴェール」は、エベネザー・ハワード（Ebenezer HOWARD: 1850-1928）による「3つの磁石」に基づき検討され、イギリスの田園都市に影響を受けた低廉住宅地の開発という面で、フランスで最初の実例に相当するものであり、こうした点でランスの郊外地に建設されたこのほかの田園都市とは明らかに異なるものであった⁴¹⁾。

また「シュマン・ヴェール」が敷地面積45ha、住戸数600戸という、いずれの田園都市よりもはるかに規模が大型になった背景に、ホワイエ・レモワが第一次大戦後、都市復興や低廉住宅の聖書とされた著作『被災都市復興の方法⁴²⁾』や『荒廃地区の明日の都市⁴³⁾』の著者グラネ、オビュルタン、アルフレッド・アガシュ⁴⁴⁾（Alfred AGACHE: 1875-1959）、ルドンによる影響も指摘される⁴⁵⁾。こうしてサン＝ニケーズ教会堂を中心に、交通、衛生と健康、美学と景観の整った新たな田園都市「シュマン・ヴェール」はランス復興の象徴にもなったのである⁴⁶⁾。

4. おわりに

国立美術学校は、ローマのフランス・アカデミーでギリシャやイタリアの古代、中世、近世の歴史的建造物を課題に、実測調査や復元図、修復案の制作に没頭した者たちを中心に、国家の建築の担い手を育成する教育機関であった。前世紀に建設されたオペラ座や図書館、駅舎などの公共施設はこうした建築教育を受けた者たちによって実現したものである。一方、ランスの都市復興と田園都市の開発は、トニー・ガルニエ（Tony GARNIER: 1869-1948）に刺激を受けて、都市に関心を抱き、ミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会に集まった建築家が、イギリスやアメリカの参照、法律の制定、協会組織の創設などの周到な準備を経て、フォードやオビュルタンら、パリの建築家を中心に実現させたものである。

本来、国家の建築の担い手として教育された建築家たちの中から、社会に焦点を当て、建築や都

市に貢献する者たちが現れ、こうした一連の事業が実現したのである。

このように第一次大戦後のランスにおける都市復興と田園都市の開発は、その基本計画から住宅地開発、そして住宅建設という事業の枠組みの在り方や、これらの事業を実施する各種の組織とそれぞれの役割分担、法律の制定から提案の実現に至る実施計画など、こうしたさまざまな点で不可欠な検討課題であるとともに、建築家、都市計画家、造園家が社会で果たす役割という点から専門家の貢献を捉え直すための題材になりえるものでもあろう。

註

- 1) 国立美術学校は1698年に設立された絵画、彫刻、版画、建築の4部門からなる芸術家教育機関で、建築部門は1671年に創設された王立建築アカデミーに由来し、1816年からほぼ唯一のフランスの建築家養成機関。
- 2) ローマ賞受賞者のアンリ・プロスト（Henri PROST: 1874-1959）、エルネスト・エブラール（Ernest HÉBRARD: 1875-1933）、ジョスリーらを筆頭とした建築家が、ガルニエがローマのフランス・アカデミーで描いた「工業都市 Une Cité industrielle」に刺激を受けたとされ、3者ともに20世紀前半の都市計画ユルバニスムの尽力した。
- 3) ミュゼ・ソシアルは、1894年にアルベール・ド・シャンブラン伯（Joseph Dominique ALDEBERT DE CHAMBRUN: 1821-99）の出資に基づき創設された、労働組合や社会保険、対外関係などの調査、検討、提言を行う民間の公益団体で、その手法は土木技師で政治家となるフレデリック・ル・プレー（Frédéric LE PLAY: 1806-82）に影響を受けた社会調査に基づいたものであった。
- 4) 都市・農村衛生部会は、1908年に低廉住宅の建設と都市計画の導入を検討するために設立され、協会組織の創設や都市計画法の制定に尽力した建築家や造園家、測量士たちが政治家や弁護士、医師らとともに議論して、20世紀前半フランスにおける新たな都市計画、ユルバニスムの萌芽に大きな役割を果たした。
- 5) Loi du 14 mars 1919 concernant les plans d'extension et d'aménagement des villes. 本法は1924年に改正された。Loi du 19 juillet 1924 modifiant et complétant la loi du 14 Mars 1919 sur les plans d'aménagement, d'embellissement et d'extension des villes.
- 6) FORESTIER (Marcel), "La Reconstruction de Reims", *La Construction moderne*, Paris, (19 juin 1927,

pp.433-411), (3 juillet 1927, pp.457-464), (31 juillet 1927, pp.505-512), (14 août 1927, pp.532-536), (4 septembre 1927, pp.568-572), (18 septembre 1927, pp.589-596), (2 octobre 1927, pp.7-11), (16 octobre 1927, pp.31-34), (30 octobre 1927, pp.57-60), (13 novembre 1927, pp.81-84), (27 novembre 1927, pp.103-107)

7) 5 rue Las Cases Paris 5^e.

8) オビュルタンはパリ国立美術学校でパスカルに学び、1900年パリ万国博覧会で陸・海軍宮を手がけた後、フランス都市計画家協会の創設に参画し、パリ市内に集合住宅や学校、邸宅を残した。パリ郊外のラ・クールヌヴ、ル・ブルジュ、デュニ、スタンにおける住宅地の開発計画はドトりの下、敷地面積700haの土地に人口80,000人の新都市を描いたもの。代表作はランスの田園都市「シュマン・ヴェール」(1919-24)とその教会堂サン＝ニケーズ(1923)。

9) フォードはハーバート大学とマサチューセッツ工科大学に、その後パリ国立美術学校でゴドフロワとフレネ、パスカルに学び、1907年に卒業後、1917年までニューヨーク市で建築家・都市計画家を務めた。1909年、都市計画に転向後、アメリカで最初の都市計画に関するバンジャマン・マルシュ(Benjamin Clarke MARCH: 1877-1952)の著作*A Introduction To City Planning, Democracy's Challenge To The American City*(1909)に貢献し、1911年ウィーン国際住宅会議アメリカ代表を、ニューヨークをはじめアメリカ国内30都市の100以上の都市計画委員会、および同国、フランス、フィリピン各国で政府の顧問を務めた。その間マンハッタンにアール・デコの高層建築が出現することとなる1916年のゾーニング法の制定に関わった。フォードはコロンビア大学やハーバート大学で教鞭をとった後、アメリカが赤十字再建局を通じてフランスを再建する技術と財政に関して検討するため、1917年6月に再来仏し、ルネサンス・デ・シテに参加、アラス、ランス、ソワソン(Soissons)復興のためにフランス政府の顧問を務めた。1921年6月に帰国後、ニューヨーク、フィラデルフィア、シンシナティの都市計画に従事した。著作*Development and present status of city planning in New York City*(1914)に貢献した後、*Aide-mémoire de l'urbaniste, éd. la Renaissance des cités, Paris*(1916)、*City Planning Progress in the United States 1917*(1917)、*Out of the Ruins*(1919)、*L'Urbanisme en pratique*(1920)、*Building Height*(1931)、*Bulk and Form*(同)を残し、1925年に雑誌*City Planning*を創刊、1930年にニューヨーク地域計画協会、アメリカ・プラ

ニング協会の総裁を相次ぎ務めた。

10) Georges-Risler préidence, "Ordre du jour, Communication de M. le Major Ford, de la Croix-Rouge américaine sur le 'Town planning' aux Etat-Unis", Réunion du 2 mai 1918, *Le Musée Social*, Paris, no.7, 1^{er} septembre 1921, pp.255-264.

11) FORESTIER (Marcel), "La Reconstruction de Reims", *La Construction Moderne*, Paris, 19 juin 1927, pp.433-441.

12) Ibid.

13) Anonyme, "Plan d'aménagement d'extension et d'embellissement de Chauny", *La Construction moderne*, Paris, 11 septembre 1921, pp.394-396.

14) Anonyme, "La Renaissance des Cités", *La Construction moderne*, Paris, 15 avril-1^{er} mai 1917, pp.3-4.

15) Anonyme, "Concours, Ville de Chauny", *La Construction moderne*, Paris, 1^{er} juillet 1919, p.104.

16) FORD (George-Burdett), *L'urbanisme en pratique, Précis de l'urbanisme dans toute son extension, Pratique comparée en Amérique et en Europe*, Paris: E. Leroux, 1920.

17) Anonyme, "La Renaissance des Cités", *L'Architecture*, Paris, n°5, 1^{er} mars 1920, p.60.

18) ABELLA (Charles), "Le Plan de Reims", *L'Architecture*, Paris, n°24, 15 décembre 1920, pp.283-287.

19) アベラはパリ国立美術学校でスリエ・ド・ジゾール、ベルニエに学び、ローマ賞次席1等(1906)を受賞後、エソンヌ市庁舎とセヌ＝エ＝マルヌ精神病院の設計競技で1等、モロッコで植民地省建築家、エヌ県とパ・ド・カレ県で再建主席建築家を務めた。パルニー＝フィレン市庁舎(1924)、パリの作曲家ピエール・ド・ブレヴィル邸(1925)、ラン戦没者記念碑(1926)、フィレンのノートル＝ダム礼拝堂(1926)、ランの医療施設大型病棟(1929、破壊)、パリのカッシーニ通りのアトリエ兼集合住宅(1930)、アニエール＝シュル＝セヌのフランス国鉄集合住宅(1932)、クルブヴォアの低廉住宅(1932)、カサブランカでピエール・マ邸(1937)とパレ・ミラボー(1954)、および新聞社「ラ・ヴィジ・マロケン」カサブランカ支社屋正面改修(1953)、カンヌのタオエ邸(1938)、パリのフォック大通りの集合住宅(1939)を手がけ、1937年パリ国際博覧会イギリス館でオリバー・ヒルと協働し、ワシントン大学教授(1911-14)を務めた。

20) Anonyme, "Société professionnelles", *La Construction moderne*, Paris, 13 juin 1920, p.293.

21) Anonyme, "Concours publics, La Renaissance des Cités", *L'Architecture*, Paris, n°10, 15 mai 1920, pp.119-120.

- 22) Georges-Risler prédiene, “Ordre du jour, Communication de M. Jean Verrier, relative à d’aménagement et d’extension des villes et ses premières applications”, Séance du 23 mars 1923, *Le Musée Social*, Paris, n°.11, novembre 1923, pp.378-380.
- 23) BOURDEIX (Pierre), “Le Nouveau plan de Reims”, *La Construction moderne*, Paris, 30 janvier 1921, pp.138-141.
- 24) サンソリュは、パリ国立美術学校でモワイヨーに学び、ランスのサント＝クロティルド教会堂でアルフォンス・ゴッセ (Alphonse GOSSET: 1835-1914) と協働、歴史的建造物建築家としてランス大聖堂を担当し、市内に数多くのアール・デコの集合住宅を残した。代表作は子息と協働によるランスのカーネギー図書館 (1928)。
- 25) ドバ＝ボンザンはパリ国立美術学校でラルーとトロンシュに学び、1912年にローマ賞を受賞後、ソナム県の再建に従事した。郵便・電信・電話省建築家 (1928) に就任し、郵便局ほかを手がけて、ブーローニュ＝ビヤンクール市庁舎 (1934) でガルニエを補佐した。
- 26) “Section d’hygiène urbaine et rurale, Séance constitutive du 14 janvier 1908”, *Le Musée social*, Paris, no.2, février 1908, pp.56-57.
- 27) ドトリは理工科学校を卒業後、第一次大戦後の鉄道の拡充に尽力し、北部鉄道会社主任技師 (1918) から国有鉄道総裁 (1928-37) に就任し、さらにドゴール政権下で初代復興・都市計画大臣 (1944-46) を務めた戦災復興の立役者のひとり。
- 28) H. (L.), “Maison ouvrières”, *L’Architecture*, Paris, vol.XXXVI n°.6, 25 mars 1923, pp.73-76.
- 29) L. (F.), “Les Habitation à bon marché dans les région libérées”, *La Construction moderne*, Paris, 1^{er} octobre 1922, pp.2-5.
- 30) シャルボンノーはビネガーの生産で財を成した家に生まれ、社会的カトリシズムの影響を受けて、イギリスの田園都市を見学し、地元ランスから低廉住宅の整備に尽力した産業家。
- 31) L. (F.), “Habitations à bon marché”, *La Construction moderne*, Paris, 29 janvier 1922, pp.137-140.
- 32) GEORGES-RISLER, “Georges Charbonneau”, *Le Musée Social*, Paris, n°.11, novembre 1933, pp.375-378.
- 33) 拙論「戦間期フランスにおける教会堂の変容」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』兵庫県立大学環境人間学部、第22号、2020年3月、81-96頁。
- 34) Anonyme, “Le Foyer rémois”, *La Construction moderne*, Paris, 11 novembre 1923, pp.63-64.
- 35) CHARBONNEAUX (Georges), “L’Oeuvre du ‘Foyer Rémois’”, *Le Musée Social*, Paris, n°.1, janvier 1924, pp.1-9.
- 36) Anonyme, “Les Familles nombreuses et le logement”, *Le Musée Social*, Paris, n°.11, novembre 1928, pp.305-332.
- 37) FORESTIER (Marcel), “Le Foyer Rémois, Cité-Jardins des Trois Fontaines”, *La Construction moderne*, 27 janvier 1929, pp.194-200.
- 38) Anonyme, *Le Foyer rémois*, Reims: Debar, [s.d.]
- 39) FORESTIER (Marcel), “La Reconstruction de Reims”, *La Construction moderne*, 13 novembre 1927, pp.81-84.
- 40) RIGAUD (Olivier), *Reims à l’époque de l’art déco, une ville reconstruite après la première guerre mondiale*, Reims: Scérén-Crdp Champagne-Ardenne, 2006, p.19.
- 41) Anonyme, *op.cit.* 34), pp.63-64.
- 42) RISLER (Georges) pref., AGACHE (Donat-Alfred), AUBURTIN (Jean-Marcel), REDONT (Edouard), *Comment reconstruire nos cités détruites, notions d’urbanisme s’appliquant aux villes, bourgs et villages*, Paris: A. Colin, 1915.
- 43) AUBURTIN (Jean-Marcel), BLANCHARD (Raoul), *La Cité de demain dans les régions dévastées*, Paris: Colin, 1917.
- 44) アガシュはパリ国立美術学校でラルーに学び、世界旅行中から社会学に傾倒した後、キャンベラ (1912-13)、ダンケルク (1913、20-23)、カサブランカ (1914)、パリ (1919)、ランス (1921)、クリエル (1926)、ポワティエ (1926)、ディエップ (1927)、ジョワニー (1927)、トゥール (1927)、オルレアン (1927)、リオ・デ・ジャネイロ (1927-30、32-38)、リスボンとコスタ・デル・ソル (1933-35)、チュニス (1933)、イスタンブール (1934)、クルティバ (1938-51) で都市計画を中心に尽力した。ミュゼ・ソシアルでは都市・農村衛生部会で広報活動を担当したパリ都市計画家協会創設者のひとり。
- 45) Anonyme, “Le Foyer Rémois”, *L’Architecte*, Paris, juillet 1926, pp.52-56.
- 46) RIGAUD (Olivier), *op.cit.*, 40), p.5.

参考文献

- CONNESON (Agnès), HARDOT (Ève), “Les Cités-jardins de la ville de Reims”, *Villes reconstruites du dessin au destin*, [actes du colloque internationale des villes reconstruites à Lorient du 20 au 22 janvier 1993] Paris: L’Harmattan, vol.2, 1994, pp.225-228.
- BERDOULAY (Vincent), CLAVAL (Paul), *Aux débuts de l’urbanisme français*, Paris: L’Harmattan, 2001.
- COSCIA-MORANNE (Alain), *Reims, un laboratoire pour l’habitat, des cités-jardins aux quartiers-jardins*, Reims: Scérén-Crdp, 2005.

- DOREL-FERRÉ (Gracia), HENRY (Delphine), *Foyer Rémois, La Cité-Jardin, une histoire ancienne, une idée d'avenir* [actes du colloque européen du Foyer Rémois à Reims du 21 au 22 septembre 2000] Reims: Scérén-Cdrp, 2003.
- FORD (George-Burdett), WARNER (Ralph F.), *American Institute of Architects Committee on Town Planning, City Planning Progress in the United States 1917*, Washington, D.C.: Journal of the American Institute of Architects, 1917.
- FORD (George-Burdett), *First Interallied Town Planning Conference, held in Paris, June 11, 12, and 13, 1919*, Paris: La Bibliothèque de la Renaissance des Cités, [1919]
- HORNE (Janet R.), BERGERON (Louis), *Le Musée social, Aux origines de l'état providence*, Paris: Berlin, 2004.
- HORNE (Janet R.), *A Social Laboratory for Modern France, The Musée Social and the Rise of the Welfare State*, Durham: Duke University Press, 2002.
- LEYMARIE (Michel), CHAMBELLAND (Colette), *Le Musée social en son temps*, Paris: Rue d'Ulm, 1998.
- POTIER (Dominique), *Reims 1919-1930, reconstruire la cité*, Reims: Éditions Carnet de Serntier, 2015.
- RIGAUD (Olivier), *Reims au temps de l'Art déco*, Paris: Édition du huitième jour, 2003.
- RIGAUD (Olivier), "Reims reconstruction 1920-1930", *Villes reconstruites du dessin au destin*, [actes du colloque internationale des villes reconstruites à Lorient du 20 au 22 janvier 1993] Paris: L'Harmattan, vol.2, 1994, pp.89-98.
- RIGAUD (Olivier), BÉDARIDA (Marc), *Reims reconstruction 1920-30*, Reims: Ville de Reims, 1988.
- SAUNIER (Pierre-Yves), CLAUDE (Viviane), *L'Urbanisme au début du siècle de la réforme urbaine à la compétence technique*, HAL CCSD: Fondation Nationale des Sciences Politiques, 1998.
- THIBAUT (Michel), *Quand Reims est sortie de ses remparts le Clairmarais*, Reims: Les Amis de Clairmarais, 2002.
- 拙論「ランスのアール・デコ」『建築史学』建築史学会、第53号、2009年9月、84-94頁。

謝辞

本研究は科研費 20K04907 に基づく成果の一部である。